

○南方各地に於けるキンマの土名に就て（藤田安二）Yasuji FUJITA: On the local names of Betel pepper in Southern Asia.

前報¹⁾に續いて更に廣く南方各地に於けるキンマ (*Piper Betle* Linn.) の土名を集め、その民族学的意義を求めるとする。

1924 年 Przyluski は「インドアーリア語に於ける非アーリア語借用」なる論文に於て Sanskrit に於けるキンマの呼称 tambula はオーストロアジア語源であつて、アーリア民族が北方寒冷の地方から印度の熱帯に來り、そこに栄えていたオーストロアジア語族から語彙を借用したものであると主張する²⁾。即ちオーストロアジア語族に於けるキンマの呼称は Khmer にては mluv, Siam にては phlu, Old Annamese にては blau, Mon にては jablu であつて、これ等のものより Sanskrit の tambulam, Pali の tambuli, tambulam, Prakrit の tambolam, tamboli 等が出來たものであつて³⁾、ペルシヤ語の tambul も亦明かにこの系統に属する。

さて Khmer の m-luv, m-luw の原型は Przyluski によれば malu であるが、この型のものは現在そのまま小スンダ諸島に残存し⁴⁾、Solor 島にては malu, Alor 島にては maluh, Timor 島にては moloh, Kisar 島にては malhu, maluhe となる。

又 Mon の jablu 型としては Malay の jambai, jambi³⁾, Sumatra 中部西側の Minangkabau の tjambai, Sumatra 最南部の Lampong の tjambai, Celebes 北部の Golontalo の tembe 等がある⁴⁾。

Old Annamese の blau 型としては Sumatra 北部の Gajo の bio, Alas の blo, Batak の beio, Sumbawa 島東部 Bima の bulu (Kolo-dial), Celebes 北部の Parigi の bolu, Barée の baulu, Celebes 西南部の Mandar の baulu 等がある⁴⁾。

前報¹⁾に於て述べた様に台灣に於ける Bunun の bira, Panapanayan の bira, Amis の bira, 花蓮港熟蕃 Kabaran の vera も亦この系統に属するが、Sumatra 西部の Engano 島ではキンマを furu-kuwe 又は puro-kuwo と言う。これは明かに Annam の blau, Siam の phlu の流れを引くもので、このものが更に Timor 島で furuk となり、又西部 New Guinea に fur, furdor, furikaw として残っているのは⁴⁾誠に注目すべき周辺現象で、特に Engano 島と西部 New Guinea との furukuwe, furikaw の合致はこのものの古代性を示すものである。

支那に於ける扶留 (fuliu, furu) は吳錄地理志、蜀記に出で、5 世紀の齊民要術に引用されて残つているが、これまた明かにこの系統に属し、印度支那から南支への古い傳播を示すものである。

又 Hindū にてもキンマを bira, bri と称するが、これは台灣蕃族のキンマの呼称 bira, vera と完全に一致する。これは前報¹⁾に於ても述べた如く上記台灣蕃族が Hindu 文化の影響を受けている事を示す。Tamil 語、Malayalam 語等に於ける vettilei, vettilla は veru-ila より出て simple leaf を示すが⁵⁾、台灣の蕃族の bira, viri が又

葉を示す事はこの兩者の関係を一層明かにするものと思える。この vettila から西歐の betel が出た事は人のよく知る處である。

更にこの blau 系の流れを引いて別に分化したものが Borneo の Dajak の buju, Celebes Golontalo の biu, Buolsch の buju, Tolitoli の biu, 北部 Halmahera Galelo の bido, Ternate の bido, Tidore の bido 等⁴⁾であつて, Philippine に入つては Sulu の buyu, Bisaya の buyok, Mindanao 島東北部の Manobo の buyog, Tagalog の buyo-anis, Luzon 島東南部の Bicol の buyo, buyó-buyo となる⁶⁾。同系異層と考えられる。

次に興味があるのは gaud 系であつて Philippine に於ては Luzon 島の Pangasinan にて gaóed, Ilokano にて gaúed, Itaneg にては gauod と称し⁷⁾, 又 Bataan にても gawed と称する⁸⁾。然るに台灣の Yami も同系の gaud である^{8),9)}。台灣本島に於ける Rukai の ragao; Paiwan の zagao もこの系統で, gaod→gao→zagao→ragao の如き関係にある。Borneo の Dajak の一部でキンマを laoed⁴⁾ と言うのも同系である。

又別に luet 系があるが, Borneo の Dajak の一部でキンマを luet, luat, rawut と言ひ, これは Halmahera 南部では lélè, Ternate でも lélè となる⁴⁾。然るに Philippine の Bataan, Bulacan, Rizal, Cavite, Tayabas 等にては letlèt, litlit となる¹⁰⁾。恐らく Dajak の luet から一方 Philippine の lètlèt が出て, 他方 Halmahera の lélèt が出了ものであろう。

この外 Mollucas には amu 系があり, 西部 Ceram にては kamu, amu, 南 Ceram にても kam, amu; Amboina にては amu, Ulias 島にては amu, amul, amulo となり, Buru 島にては gamo; Sula 島にては gam となる。

又小スンダ諸島中の Tanimbar 島には inaan, owaan, naan 等があり, Kai 島には naan, 西 New Guinea にては kenaan, kènan, 北 New Guinea にては keman となる。更に Ceram 島東部にては ain, nein があり, 西 New Guinea にては nain, nandain となり, 西南 New Guinea にては ain である。

なお Sumatra 西部海上の Nias 島でキンマを afo と言うが, 遠く離れた New Guinea の西部にても afe と言う處があるのはこれ又甚だ注目すべき残存現象である⁴⁾。

又台灣の Yami はキンマを rankap^{8),9),11)} と呼び, Sumatra の Atjeh にては ranub, Celebes 北部にては rambik⁴⁾ とも呼ぶが, 或は一系統に属するものかも知れない。

これ等の外最もよく知られ又最も新しいものが Malay の sireh であつて, Sumatra にても Malaid は sèwèh, sihè, sirèh, siriah, sirih, suruh 等と呼び, Minangkabau にては sirieh, Gajo にては séreh, Borneo の Dajak も sirih; Sunda にては seureuh, Java にては sedah, suruh, Bali にても sedah, madura にては sèrè となる^{4),12)}。

以上の如くキンマの方言は最古代に於けるオーストロアジア語を基盤として大きな層をなして拡がる。これを blu 層と名付ける。この基底の上に最上層として Malay 系の sireh 層があり, その中間に色々の雜層が存在する。遠く離れた散在層は明かに古いも

のの残存であり、近接した小地域のものは比較的新しいものである。かくしてこれ等の関係はそのまま民族と文化との移動とその方向を示す。

(通産省大阪工業技術試験所精油研究室)

文 献

- 1) 藤田：台灣博物學會會報，26, 190 (1936). 2) 松本：古代文化論，47 (1932) (現代史學大系 10). 3) Laufer: Sino-Iranica, 268 (1919); 松本：南亞細亞學報，1, 20 (1942). 4) Heyne: Nutt. pl. Nederland. Ind., 1, 517 (1927). 5) Yule, Burnell: Hobson, Jobson, 89 (1903). 6) Merrill: Enum. Phil. Flow. Pl., 2, 4 (1923); Brown: Min. Prod. Phil. Forest, 3, 66 (1921). 7) Merrill: Enum. Phil. Flow. Pl., 2, 4 (1923). 8) 鹿野：東南亞細亞民族學，先史學研究，120 (1946). 9) 奥田，岡田，野村：大南洋 (太平洋協会編)，352 (1942). 10) Brown: Min. Prod. Phil. Forest, 3, 66 (1921). 11) 佐々木：台灣博物學會會報，10, 152 (1920). 12) Burkhill: Dic. Econ. Prod. Malay Pennis., 1738 (1935).

○ヤグラタマネギ (新稱) に就て (青葉 高) Takashi AOBA: Top Onion cultivated in Japan.

昭和 25 年山形県東田川郡押功村佐藤氏培養中の櫻葱と称するものを調査の結果、これが所謂 Top Onion であることを認めたが、最近農林省九州支場園芸部長熊沢三郎氏よりも同様同定され、且本種が青森、岩手県下で栽培されて居る事を報された。

從來此の Top Onion は我国の園芸書にも玉葱の変種 *Allium cepa* L. var. *viviparum* Metz. として記載されて居るが、本邦内の栽培例は見当らず、從つて和名もなく、熊沢氏も “*A. cepa* 系の櫻葱” と称して居る。併し *A. fistulosum* L. var. *viviparum* Makino がヤグラネギの和名で呼ばれているのであるし、同名で本種を呼ぶ事は適当でなく、しかも本種が現に我国で培養を見て居るのではあり、此の意味から Top Onion はヤグラタマネギと呼ぶのが適当であろう。

但し本種が眞の Top Onion である事に就ては猶若干の疑点もあり (本系統の染色体はネギ及びタマネギのそれと全然異り、むしろワケギの染色体と極めて類似して居る。栗田氏未発表) 是非とも眞の Top Onion と比較する要がある。

尙本種の特性は下記の通りであるが、更に本種は雄性不稔系と認められ、此の点からも興味あるものである。

特性 草丈、60 (以下単位 cm). 葉鞘部の長さ 14, 地下球の横径 2.6, 縦径 3.9, 花莖の長さ 1 段 63, 2 段 31, 3 段 5, 最も太い部の径 2, 胎芽の横径 1.7, 縦径 1.9, 胎芽数は 1 段目 4.7, 2 段目 2.8, 3 段目 2.0, 花数 17~180. 花應分化期は 2 月, 抽苔 5 月中下旬, 開花 6 月下旬, 夏期には葉が枯れる。花はタマネギの類に似る。但し薬の退化のため結実せず、胎芽に依り繁殖する。春日生長した葉身を球と共に食用とする。

(山形大学農学部園芸学教室)